

薪ストーブを焚きたいな と思う位、昨日あたりから急に寒くなりました。小さい頃の記憶では、秋のお祭り（9月23日）には、いつもコタツを入れていた記憶があります。一昨日、青山家の稲刈りをしました。秋晴れ以上の暑さで、真夏並みに首のあたりがじりじりと日に焼けました。もちろん、見学に来た大地の子どもたちひとりひとりを、コンバインに乗せて刈取りをしました。毎年そうですが、まだ刈り取られていない黄金色の田んぼの真ん中から見える景色・・・秋の透き通る青い空・白い雲・黄金色の田んぼ・ちょっと紅葉が始まった林・稲の匂い・イグっぱい手足・脱穀の音・そして何と言っても、田んぼで遊ぶ子供たちの姿・・・ これらが1番大好きな光景です。

田んぼで過ごす子どもたちの姿は、もしかすると大地で1番の光景かもしれません。特に、大地の田んぼのロケーションは、周囲が丘に囲まれ、正面には斑尾山、右に雑木林、左にリンゴ畑、遠くに小さな民家、あまり車も通らず、里山と言う感じです。10年前は、ここを通る道も、未舗装であり、青山家の子どもたちは、土の道を通って田んぼへ行った記憶があります。

田んぼでは、側溝や裏側の川に入ったり、藁束で遊んだり、田んぼの土をこねたりして過ごしますが、いつも時間を忘れて、これと言った派手な遊びや歓声もなく、黙々と遊びが展開されていきます。田んぼには、不思議と魅力があるようです。

これから、稲刈り、そして、親子脱穀があります。ぜひ、田んぼの魅力を、子どもたちと満喫していただければと思います。



【ギリギリを試す】

友人の結婚式で、先日東京まで自転車で行きました。行程では、230キロと踏んでいましたが、実際は290キロありました。妻も同行。当初は妻は別便の予定でしたが（時間が限られており、足手まといになるという理由）、一緒にその感動を共有したいという要望があり、それでは、誕生日のプレゼントとして、引率しようという事になりました。結婚式の準備等で、妻は、半分の高崎あたりまで行って、後は輪行という事で納得してもらいましたが、いつかは完走する予定です。

妻は、初めて高所登山するような気持ちで、当日の朝は、かなり緊張していたようですが、走り始めたらいつものように軽快に距離を稼ぎます。自転車の業界では、連続50キロ走行の壁と言うものがあり、言うなれば、50キロを超えるあたりから、疲れがどっと出るという事です。この50キロ超が、上田から軽井沢への登りです。結局、大地を7時半に出て、軽井沢には、予定の1時が、何と5時でした。軽井沢で豊かな昼食をともくろんでいましたが、暗い旧道碓氷峠を下る事になりました。180にも及ぶ暗いカーブを、頼りない自転車ライトでゆっくりと下り、峠の釜めしのおぎのやの灯りを見たのが、6時半。とても感激しました。その後、暗闇を走り、宿に着いたのは午後7時半。（妻がいなかったら、JRの駅で野宿する予定でしたが、誕生プレゼントも兼ねているので、温泉泊）この日は、ガスバーナーを持っての道中、自炊の食事でしたので、夜は、温泉と夕食を楽しみ、疲れを癒しました。本日の走行距離は135キロでした。

翌朝、妻と別れを告げて、東京を目指しました。東京まで120キロとあり、昨日よりも楽勝（坂がない）と思い、高崎 熊谷 そして荒川沿いのサイクリング道を走りました。午後4時半に都内の、明治記念館の式場がゴールです。この日は、カップラーメンとバナナだけを持ち、都内あたりで余裕で昼食をともくろみ、トップスピードで走りました。埼玉あたりから、新宿副都心が見えた時は大感激。でも走る割には、時間が刻々と過ぎていき、結局都内に入り、疲れがピークとなり、明治記念館には、4時35分着。結婚披露宴は、面白い友人なので、派手な面白い服装でおいで下さいという事でしたので、そのままの自転車スーツとリュックサックとヘルメットで入場しました。立食パーティでしたが、空腹と疲れがピークだったらしく、貧血と胃痛で、1人だけ座り込み、1時間ほど、具合が悪く休んでいました。その晩も、倒れるように眠り込み、翌朝は、都心の光景を見ながら、ヨガでからだを整えて、回復しました。昨日の走行距離、145キロでした。

久しぶりに、無理をしたという実感がありました。限界は自分が勝手に課せるものであるもので、自業自得ですが、登山では体験したことのない疲れでした。まず、到着時間が決まっている、それまでに着かねばならないという制約、次に、信号や車などの人工的な事に制約されることなどが、自然の中を歩く登山とは、決定的に違いがあります。だから、自分のペースがつかめず、人工的な環境から左右されるので、疲れたと思います。体力的には問題がありませんでしたが、特に、都内の入ってかなり疲労感が高まりました。

今回の大きな疲労感から、現在（今）に生きる幼児達に、期限や目標設定をすること、そのために練習をすること、そして、子どもたちのペースではなく、人工的な環境設定や大人の都合などでコントロールされる子ども達のことを考えてみました。登山では、大きな時間設定はありますが、天候の変化や体調の急変がない限り、自己ペースを選択して、進むことができます。人工的な制約（信号待ちやラッシュはなく）なく、その代わりに、花や景色に見とれたり、動物に会ったり、おやつを楽しみ過ぎたりという、自己自然制約はありますが、だから、大地の環境で遊んでいる子どもたちは、精神的疲労（幼児の体力的な疲労はほとんどありません、それは精神的疲労が反映されるものです・・・それは登山やお祭りなどの姿をみればわかりますね）はなく、いつもいきいきと遊んでいます。

幼児に、いつまでに仕上げる、発表会のために練習して作り上げる、時間割を設定して、一話完結編のプログラムを組む、車や電車で移動して、人工的な制約に巻き込まれたりする暮らしは、どうしても疲れることでしょう。大人でも疲れるのですから、原始的な子どもたちは、更にその影響を受けると思います。また、大人が、家族が、そのような暮らしが続くと、子どもたちは、その親の精神的な心理を反映、投影されるので、落ち着かなく、精神的に疲労して行くこともあります。大人は、人工的な疲労を回復させるのには、自然体験をしたり、ヨガや瞑想など様々なことで、回復させる術がありますが、子どもたちは、それらを選択することはできません。子どもたちには、そのような環境を設定しないことが、大人の大切な役割、子育て環境だと思います。

今回の自転車の旅。まだまだ身体は動く、元気だという実感がありました。どんな距離でも、ひたすらこげば着く。でも、道中で、見晴らしの良い田圃道や土手沿いの道では、疲れ知らずで快調であり、国道や都内では、ペースが落ち、疲れ倍増。所詮、田舎者か都会アレルギーか。いや、子ども達との暮らしの中で、子どものような波長と体内時計が培われているのだらうと、勝手に自己分析してみました。

自然のペースで歩く登山も人工的に制約されやすい自転車も、どちらも好きですが、登山の方がやはりいいかもしれません。今冬は、ゲレンデスキーからバックカントリーへ移行する予定。どちらにしても、その遊びや環境で、自分を追いつめたギリギリの体験、甲子園球児のような熱い青春必死体験を楽しみたい自分がいます。